

科目【国語，数学】

〔各100点
50分〕

出題科目	ページ	解答できる科目		備 考
		総合情報学部	看護学部	
国 語	(2) ～ (27)	○	○	
数 学	2 ～ 5	○	○	

◎「総合情報学部」および「看護学部」の受験者に共通する注意事項

<注意事項>

- 1 「国語」および「数学」の2科目のうち、いずれか1科目を選択し解答してください。
- 2 解答用紙に受験番号、氏名、フリガナを正しく記入してください。また、受験番号のマーク欄にも必ずマークしてください。
- 3 解答用紙の解答科目欄には、選択する科目を必ずマークしてください。解答科目欄が無マーク、または複数マークの場合、0点となります。
- 4 解答用紙の解答欄は、「国語」と「数学」とで異なっており、色分けして表記されています。解答科目欄にマークした後、矢印に沿って解答欄を確認してください。
- 5 解答には、必ず黒鉛筆（H、F、HBに限る）およびプラスチック製消しゴムを使用してください。
- 6 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁や乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、挙手の上、試験監督者に申し出てください。
- 7 問題冊子の余白等は適宜利用して良いですが、どのページも切り離さないでください。
- 8 不正行為に対しては厳正に対処します。不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。なお、不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。
- 9 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

裏面（B面）にも注意事項がありますので、必ず読んでください。

＜注意事項＞

解答用紙にマークする際は、下の記入例にならっておこなってください。

- ◆「国語」については、設問ごとに解答番号（

1

2

3

 …）
が示されているので、解答は下の＜記入例＞にならってそれに対応する解答番号
にマークします。

〈記入例〉

設問 1

問 1

1	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- ◆「数学」については、問題文中の

ア

 ,

イ

 …などの

--

 内の
カタカナの文字一つ一つには、それぞれ 0～9 の数字のいずれか一つが対応しま
す。したがって、解答は下の《記入例》にならって、あてはまる数字をア、イ、ウ
…で示された解答欄にマークしてください。

解答が分数になるときは、必ず既約分数で答えてください。約分可能な答えは不正解とします。

《記入例》

I

ア	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

表面（A面）にも注意事項がありますので、必ず読んでください。

数 学

(解答番号 ア ～ ラ)

I 次の各問いに答えよ。

問1 $(x - 1)(x - 3) = x^2 - \boxed{\text{ア}}x + \boxed{\text{イ}}$

問2 $2x^2 - 3xy - 2y^2 + 5y - 2 = (2x + y - \boxed{\text{ウ}})(x - \boxed{\text{エ}}y + \boxed{\text{オ}})$

問3 2進法で表された数 $1001_{(2)}$ を10進法で表すと $\boxed{\text{カ}}_{(10)}$ である。

問4 $0^\circ \leq \theta \leq 90^\circ$ のとき、 $2\sin^2 \theta - 7\sin \theta + 3 = 0$ を満たす θ は $\boxed{\text{キ}}\boxed{\text{ク}}^\circ$ である。

問5 正12角形の対角線の本数は $\boxed{\text{ケ}}\boxed{\text{コ}}$ 本である。

問6 5つの値からなるデータ 1, 3, 6, 2, 8 の分散は $\boxed{\text{サ}}.\boxed{\text{シ}}$ である。

Ⅱ 次の各問いに答えよ。

問1 $f(x) = x^2$ とする。 $t = 2x - 3$ とするとき、 $f(t) = 25$ となる x の値のうち、最も大きい値は $\boxed{\text{ス}}$ である。

問2 三角形 ABC において、辺 AB, 辺 BC, 辺 CA の長さがそれぞれ 6, 7, 11 であるとき、三角形 ABC の面積は $\boxed{\text{セ}}\sqrt{\boxed{\text{ソ}}\boxed{\text{タ}}}$ である。

問3 2 次方程式 $x^2 + 2ax - 2a + 3 = 0$ が異符号の解をもつとき、定数 a のとり得る値の範囲は $a > \frac{\boxed{\text{チ}}}{\boxed{\text{ツ}}}$ である。

問4 硬貨 2 枚を同時に投げたとき、少なくとも 1 枚は裏が出ているという条件の下で、2 枚とも裏が出る確率は $\frac{\boxed{\text{テ}}}{\boxed{\text{ト}}}$ である。

Ⅲ 関数 $f(x) = (x^2 - 6x + 6)^2 + 4(x^2 - 6x + 6) + 5$ について、次の各問に答えよ。

問1 $t = x^2 - 6x + 6$ のとき、 t の値の範囲は $t \geq -\boxed{\text{ナ}}$ である。

問2 $f(x)$ の最小値は $\boxed{\text{ニ}}$ である。また、 $f(x)$ が最小値となるときの x の値は $x = \boxed{\text{ヌ}}, \boxed{\text{ネ}}$ である (ただし、 $\boxed{\text{ヌ}} < \boxed{\text{ネ}}$)。

問3 $g(x) = |f(x) - 5|$ のとき、 $g(x)$ の最小値は $\boxed{\text{ノ}}$ である。また、 $g(x)$ が最小となるときの x の値は $x = \boxed{\text{ハ}} \pm \sqrt{\boxed{\text{ヒ}}}$ である。

Ⅳ 0, 1, 2, 3, 4, 5 の 6 個の数字をすべて用いて 6 桁の整数を作る。
次の各問いに答えよ。

問 1 全部で フへホ 通りの整数ができる。

問 2 小さい方から 200 番目の整数は マミムメモヤ である。

問 3 432051 以下の整数は コヨラ 個である。

国語

(解答番号 1 37)

I 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ロボットは本当に心を持つことができるのだろうか。この問題への回答はもちろん「心」の定義によって変わってくるが、「人間のような心」ということに限定すれば、^アロボットにそうした「心」を実装することは不可能である、と私は考える。人間の「心」が持つような機能を完全に備えた「心」をロボットが持つためには、そのロボットは人間と同じ道徳的主体である必要がある。人間の「心」がどのようなメカニズムを持っているのかということが重要なのではなく、「人間」と見なすことができる存在はどのような存在なのか、ということが重要なのである。

〔中略〕

我々がロボットを社会の^イ一インとして、つまり、人間と全く同じ道徳的主体として見なすようなことになるようならば、ロボットは、人間と同じような「心」を持つにいたったと言えるだろう。しかし、ロボットに道徳的地位を与えること自体が不可能なことであるように思われる。そもそも人間がロボットを開発し、利用する動機は、人間の作業の一部をロボットに肩代わりしてもらう、ということにある。もしロボットが人間と全く同じ道徳的地位を持ったならば、そのような肩代わりは難しくなるだろう。人間は人間と全く同じ道徳的地位を持ったロボットを作り出す動機を欠いている。そうしたロボットを実現するために必要とされる膨大な研究開発費や資源の消費、社会的コストを考慮するならば、そのようなロボットは実現可能なものではない。クリアしなければならない技術的な問題が無限にあるだけでなく、仮に技術的問題がクリアされたとしても、そのようなロボットを社会の中で位置づけていくための社会的制度の変^エカクが必要になってくる。

「人間のようなロボットを作りたい」という願望自体が仮に受け入れ可能なものとしても、その願望を実現するためのコストは人間社会にとって受け入れ可能なものではないだろう。

もちろん、「人間のようなロボット」の実現が遠い未来のことである限り、人間は X。人間に近いロボットであるほうがいろいろと便利なこともあるだろう。しかし、本当に人間に近いロボットを作るとなると、話が変わってくる。そのようなロボットは、その道德的地位をめぐっているいろいろと厄^③カいな問題をもたらすことになる。道德的な地位があいまいな人工物の存在は、人間社会の基盤に混乱をもたらすことになるかもしれない。一見人間のように見えるロボットを作ることは比較的容易だが、真に「人間のような機械」を作るには膨大なコストがかかる。そのようなコストをかけて、人間社会にとってリスクがあり、あまり利益のなさそうな人工物を人間が作り出すとは思えない。

ロボットが人間のような「心」を持つことができるのかという問題に関して、ここでは「情報」の価値という観点から考えてみることにしたい。この点に関して、^(注1) 橋田浩一の一九九五年の論文が興味深い論点を提出している。橋田によれば、(初期の)人工知能研究は、^(注2) クロード・シャノンの情報概念に依拠して進められていた。シャノンのいう情報とは、「媒体を選ばずに、無制限に複製をつくったり変換したり伝達したりできるという意味においてモノ性をまったく持たない『純粹な情報』であった。ところが、実世界では、情報は何らかの物理的媒体によって担われているため、情報処理は不完全なものにならざるを得ず、そこに「部分的」が生じる。ところが、ここに「⁽¹⁾根本的な逆説が潜んでいる」と橋田は指摘する。というのも、この部分的こそが「情報の起源」にほかならないからである。「情報とは環境の分節であり、分節の目的は行為の選択であり、選択の必要性は部分的に由来する。入力を部分的にししか行為に反映させられないからこそ、入力などの側面を行為に反映させるかという選択を迫られるのである」。純粹な情報にとって物理的媒体によって担われているという部分的性は、一見制約でしかないように思われるが、この制約こそが、情報の価値を生み出すものであり、また、情報そのものを生み出すものだと言える。そうだとすれば、実は「純粹な情報」という考え方そのものが幻想なのだ

ということになるだろう。

ポーランドのSF作家スタニスワフ・レムは、『宇宙世紀ロボットの旅』の「盗賊『馬面』氏の高望み」というエピソードで、情報の価値に関する興味深い寓話⁽⁸⁾を提示している。「主人公」であるロボットの宙道士トルとクラパウチュスは宇宙海賊「馬面」に捕まり、「馬面」から「世界の真実の情報のすべてを引き出す」ように脅迫される。そこでトルは、小さな箱の小さな穴から、意味の持った情報だけを抜き取る能力を持つ、「二流の悪魔」を差し出す。悪魔は穴からあらゆる情報を取り出して紙テープに記録するのだが、悪魔は⁽⁹⁾昼夜の別なくのべつまくなし働くため、結局盗賊「馬面」は意味はあるが役に立たない情報を記したおびただしい量の紙テープに⁽⁴⁾おしつぶされてしまうのである。このSFは、情報がそれ自体では役に立たないことを示した物語であると言える。

情報が価値を持つためには、あるいはそもそも情報が情報として成り立つためには、情報を利用する利用者の関心体系に位置づけられ、「関連性 (relevance)」を持つ必要がある。橋本の論文とレムの寓話は^(注3)そのことを示している。ハイデガーとメルローポンティに依拠しながら初期の人工知能研究に対して批判を展開した^(注4)ヒューバート・ドレイファスは、この関連性の問題を「身体性」と結びつけて論じていた。人工知能批判の書として有名な『コンピュータには何ができないか』でドレイファスは次のように述べている。

人間の振る舞いがデジタル・コンピュータのヒューリスティック・プログラムによって形式化できるはずだという、心理学的、認識論的前提の支持者たちは、現段階において少なくともコンピュータは明らかに身体をもっていないのだから、人間が身体をもっているという事実を無視した知的振る舞いの理論を立てざるを得ない。身体なしで済ますことができると考えるとき、これらの思想家たちはまたもや、身体を知性や理性の妨げになると見なしてきたプラトンからデカルトに至る伝統に従っているのである。(中略) どれほど巧妙な機械が組み立てられようと、人間を機械から区別するものは、切り離された、普遍的な、非物質的精神ではなく、入り組んだ、ある状況に置かれている、物

質的身体であるということである。

人間の知的振る舞いが可能であるのは、人間が身体を持ち、「欲求の関数」としての状況の中に埋め込まれているからなのだとドレイファスは考える。意味あるコミュニケーションや相互作用が成立するのも、そうした身体を有した人間による、共有された関心の文脈においてのみなのである。知性の実現にとって、身体性や状況性が重要であるということは、後に人工知能研究や認知科学、ロボティクスなどにおいて広く受け入れられていくが、身体性や物理的制約を Y して考える傾向にあった初期の人工知能研究に対しては、ドレイファスの批判は原理的な批判となっていた。

だが身体性が大事ということであれば、まさに身体性を持ったロボットに人工知能を実装すればいいのではないか。ドレイファスはこの可能性を必ずしも否定していないように思われる。「人工知能が可能かどうかという問いは、身体を持った人工行為者が可能かどうかという問いにまで収斂^{しゅうれん}する。〔中略〕（人間を形づくっているものに十分似た材料を用いるならば、身体を持った人工行為者を作ることが原理的にできないとする理由はない、と私は思っている）」。人間と同じような身体を持ち、また、「欲求の関数」としての状況を作り出す能力、すなわち、自己保存能力を実装されたロボットを作ることができれば、人間と同じ知的能力を実装することができることになるのではないだろうか。

しかし、前で述べたような理由から、ロボットに人間と同等の自己保存能力を実装することは不可能であり、実装される自己保存能力は、人間のそれと比べて極めて限定されたものになるだろう。そうだとすれば、人間^(エ)同士で行われるのと全く同等の意味あるコミュニケーションがロボットと人間の間、あるいはロボット同士で行われるのは不可能であるということになる。

（石原孝二「ロボットと心／身体の行方」〈佐倉統「編」『人と「機械」をつなぐデザイン』所収〉より）

（注1）橋田浩——情報工学者、人工知能研究者（一九五八——）。

- (注2) クロード・シャノン—アメリカの電気工学者、数学者（一九一六—二〇〇二）。
- (注3) ハイデガー—ドイツの哲学者（一八八九—一九七六）。
- (注4) メルロ＝ポンティ—フランスの哲学者（一九〇八—一九六二）。
- (注5) ヒューバート・ドレイファス—アメリカの哲学者（一九二九—二〇一七）。

※問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えています。

問一 傍線部(1)～(4)のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

1 (1) イーン

- | | | | | | |
|---|-----------|---|----------|---|--------|
| ① | インに陽に力になる | ② | 議イン内閣制 | ③ | 観客動イン数 |
| ④ | 条約に調インする | ⑤ | イン居生活を送る | | |

2 (2) 変カク

- | | | | | | |
|---|-----------|---|---------|---|-------|
| ① | 版図をカク大する | ② | 一線をカクする | ③ | 地カク変動 |
| ④ | 一定の間カクをとる | ⑤ | 皮カク製品 | | |

3 (3) 厄カイ

- | | | | | | |
|---|----------|---|----------|---|-------|
| ① | 駅のカイ札を出す | ② | 懲カイ免職処分 | ③ | 妖カイ変化 |
| ④ | カイ既月食 | ⑤ | 病人をカイ抱する | | |

4 (4) オしつぶされ

- | | | | | | |
|---|-----------|---|------------|---|-------|
| ① | 証拠品をオウ収する | ② | 芸道の秘オウを極める | ③ | オウ急処置 |
| ④ | 公金をオウ領する | ⑤ | オウ時を振り返る | | |

問二 傍線部(ア)「ロボットにそうした『心』を実装することは不可能である」とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

5

① 人間の「心」を持つロボットを実際に作るとなると、開発のための技術的な問題をクリアするだけでなく、そのロボットが人間の機能や地位を代替することによって生じると予想される、道徳的な問題もクリアする必要があるから。

② 仮にロボットが人間の「心」を持つならば、人間と同じように道徳的主体でなければならないが、そのようなロボットを実現させるためには膨大なコストがかかり、それを負担しようとするまでの動機と利益が人間の側にはないから。

③ ロボットに人間の「心」を持たせるためには、まず「心」のメカニズムが解明されなければならないが、そのような研究は現実的なメモリットがあまりないため、社会的なコストの負担に関して一般の理解を得るのが困難であるから。

④ 人間の「心」を持った道徳的主体のロボットを開発するためには、「心」の定義が明らかになっていなければならないが、現時点ではそのような状況になく、また、「心」の定義が明らかになっても、コストの問題が発生するから。

⑤ ロボットが人間の「心」を持ち、道徳的主体となるためには、社会の中で人間と同等の地位を確立する必要があるが、そのような地位を制度的に認めれば、人間の価値が相対的に低下し、社会に混乱が生じるのは必定であるから。

問三

空欄

X

に入る表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

6

- ① 仕事を機械に肩代わりさせるのは非現実的だと悟ることになる
- ② ロボットに「心」を持たせることなど夢のまた夢と思うに違いない
- ③ 少しでも人間に近い振る舞いをする機械を作ろうとするかもしれない
- ④ 「人間のような機械」を作ることの方に腐心するのは確実である
- ⑤ ロボットの道徳的地位をめぐる諸問題を解決することも可能である

問四 傍線部(イ)「根本的な逆説が潜んでいる」とあるが、その逆説とは具体的にどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

7

- ① そもそも情報とは環境の分節であり、選択された部分的なものであるからこそ価値を持つため、無制限に取り出された情報はまったく役に立たないというもの。
- ② ロボットが人間のような「心」を持つことができるかという問題に関して考えるとき、一見すると無関係な情報の価値という観点を導入する必要があるというもの。
- ③ 無制限に複製し、伝達することのできる情報こそが「純粹」であるが、実際の情報は物理的媒体による制約を受けるため「純粹」ではあり得ないというもの。
- ④ 情報は物理的媒体によって担われているため、無制限なものではないが、そのような制約があるからこそ、情報は成り立ち、その価値が生み出されるというもの。
- ⑤ 媒体を選ばず、自由に複製し伝達することのできる「純粹な情報」は、仮説の中だけに存在するものであつて、現実の情報はそのように純粹なものではないというもの。

問五 傍線部（ウ）「昼夜の別なくのべつまくなし働く」を言い換えたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

8

- ① 昼か夜かを問わず、絶え間なくずっと働く
- ② 昼も夜も、いつまでもだらだらと働く
- ③ 昼であろうと夜であろうと、一心に働く
- ④ 昼から夜にかけて、ものすごい勢いで働く
- ⑤ 昼でも夜でも、何も文句も言わず働く

問六

空欄

Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

9

- ① 類別
- ② 止揚
- ③ 捨象
- ④ 異化
- ⑤ 昇華

問七 傍線部(エ)「人間同士で行われるのと全く同等の有意義なコミュニケーションがロボットと人間の間、あるいはロボット同士で行われるのは不可能である」とあるが、人間同士と同等の「有意義なコミュニケーション」を成立させるためには、どのような条件が必要であると筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

10

- ① 道徳的主体として、一定の社会的地位を獲得すること。
- ② 欲求に従うのではなく、高度な知的能力を発揮すること。
- ③ モノ性をまったく持たない、純粹な「心」をそなえること。
- ④ 物質的身体を持ち、特定の関心の文脈に置かれること。
- ⑤ 身体性や状況性といった、一切の制約から自由になること。

問八 本文の内容と合致しているものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

11

- ① 共有された関心の文脈に置かれている人間同士であっても、有意義なコミュニケーションが成り立つとは限らないほど、現実のコミュニケーションは不確実である。
- ② 初期の人工知能研究では、身体は知性や理性の妨げになるものと見なされてきたが、最近の研究では、身体のみが正しい認識を生み出す基盤であることが証明されている。
- ③ 人間同士で行われるのと同じコミュニケーションを、人間とロボットの間で実現するためには、ロボットに人間の「心」と同程度の人工知能を実装する必要がある。
- ④ ロボットに人工知能を搭載すれば、人間と同じ「心」を持ったロボットを実現することができるが、倫理的、道徳的な制約があるために、現段階では実現されていない。
- ⑤ 情報はそれ自体では役に立たず、「関連性」を持つことではじめて価値を持つということを、『宇宙世紀ロボットの旅』にある「馬面」の寓話は示唆している。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

哲学では、何か疑問を持ち、その答えやわけをもとめようとするとき、それを探究し見つけ出す方法があります。それが批判です。 ⑦

この批判ということばについて、少し説明が必要でしょう。ふだん「誰かを批判する」とか「何かを批判する」とか言うときに、私たちはこの表現を、 X ように思われます。つまり相手の誤りや欠点を指摘して咎めるような意味合いで、批判ということばを使っていることが多いでしょう。この場合、「批判」は「非難」ということばと同じような意味で使われています。

しかしこれは、批判ということばの理解としては十分だとは言えません。批判を意味するクリティック（criticism、《critique》、kritik）ということばの由来は、哲学ということばと同様に、歴史的には古代ギリシャにまでさかのぼります。ギリシャ語の《κρινω》（krino）が、そのみなもとです。この《κρινω》は、「分ける、区別する」という意味です。したがって、もともと批判ということばは、何かを細かく切り離して分けてゆく意味があるのです。

では、実際に批判とは、どのような方法なのでしょうか。

イスについて知る場面を例としましょう。最初は、それがイスだと知りません。見たことのない物体にはじめて出会うという場面です。私たちは、その物体が何かと疑問を持ったら、それを知ろうとします。【a】このとき、ただぼんやりとその物体を眺めているだけでは何もわかりません。座ることができそうだ、下には脚がついている、背もたれのようなものがある、材質を見ると木で作られているようだ、裏をひっくり返すとメーカーが書かれているなど、その物体の別の面を見たり、見えなかったところを見たりして、さまざまな角度から見ます。また、その物体がどのようにして作られているのか、さまざまな部分に細かく分けて、成り立ちや組み立てを調べます。さらに物体を分解してみれば、座面、背、脚などの部品や、それらを留めるネジなどがわかるだけでなく、強度や平^へコウを保つ仕組みもわかってきます。そこから、

とても頑丈に作られていて、座るのにはとても適しているが、その上で字を書くには不便で、放り投げても空を飛ばずに落ちて壊れ、水に浮かべるとシズンでしまうこともわかるのです。こうして、どうやらこの物体は座るために作られた物体ではないか、私たちが「イス」と呼んでいるものにあてはまるのではないか、という見当がついてきます。私たちは、その物体はイスだと、しっかりと確信を持つて言えるようになります。こうして私たちは、その物体をイスだと知るのです。

私たちは批判をつうじて、まず物事をさまざまな角度から見ます。【b】すると、その物事のいろいろな面、要素や成分、組み合わせのあることがわかります。このように、その物事がいったいどんなもので、どんなことなのか、その中身を詳細に調べ、吟味すると、今度はそれらの吟味したことを Y して、その物事にどんな能力が備わっているのか、その能力をどこまで及ぼすことができるのか、あるいはどこから先は及ぼすことができないのか、つまりその物事にどんなことができるのか、あるいはできないのか、ということが明らかになります。批判によって、その物事の能力、範囲、限界、可能性が明らかになるのです。

私たちは、こうした批判という方法を使いながら問い続けることで、知りたいと思う本当の答えや本当のわけを導き出すことができるのです。

さて、哲学とはこうやって知りたいと思つてどこまでも問い続けることなのだ、と言われて、どう思うでしょうか。

【c】哲学にたいして、あまりなじみ深く思わないかもしれません。私たちはふだん、疑問を持つことがあつても、そこからどこまでも問い続けることまではしないでしょう。日常生活のなかでは、問い続けなくても、ある程度のところまで答えが出ていれば、それで十分生きてゆけますし、問い続けなければならないほどの必要性を感じません。

では、日常生活でもあえて問い続けてみたといいます。どこまでも問い続けることは、答えやわけが導き出せても、問いをやめずに、本当の答えや本当のわけを探すことです。答えは何か、それはなぜなのか、ずっと問いかけます……。これ

はいつまで続くのでしょうか。それは誰にもわかりません。このまま問い続けて、最終的に答えやわけが出てくるかわかりませんし、本当の答えも本当のわけも、永遠に出てこないかもしれないかもしれません。それだと、問い続けている途中で、きつと問うのが嫌になってしまうのではないのでしょうか。答えもわけも出てこないのに延々と問うことをしていたら、激しい徒労感に陥りはしないのでしょうか。

このように見てくると、問い続けてもなんの意味もないような気がしてきます。けれども本当にそうでしょうか。

たとえば、幼い子どもには「質問期」と呼ばれる発達段階があります。この時期の子どもは、知的欲求、知的好奇心に動機づけられて、さまざまなことを、「なぜ?」「どうして?」と大人に問いかけてきます。そしてその欲求や好奇心をさらに膨らませます。これは私たち人間の心の成長には欠かせません。もともと私たちは誰であれ、知的欲求、知的好奇心にもとづいて、どこまでも問い続けようとするのです。

ところが、成長とともに大人になるにつれ、私たちはどこまでも問い続けるということをしなくなります。【d】それはもちろん人間として成長しているからなのですが、問い続けること自体が難しくなるのも事実です。現実問題として、日常的にどこまでも問い続ける生活を送ろうとするのは至難の業^{わざ}です。たとえば、おナカ⁽³⁾が空いたらどうするのでしょうか。何か食べるものを探すでしょう。冷蔵庫を開けると、昨日買ったケーキがあつたします。ふだんならそれを食べておわりです。しかし食べるのを待ってください。冷蔵庫にあるケーキは、本当にケーキでしょうか。いや、昨日買ったはずです。しかし昨日買ったのも本当のことでしょうか。いま目の前にあるケーキも、本当にケーキなのでしょうか。ケーキでないかもしれないし、こうやって冷蔵庫を開けてケーキを見ていること自体、実は夢のなかの出来事かもしれません。「実際に食べてみればわかるじゃないか」と言うひともいるでしょう。けれども食べたときの味や感触は、とてもリアルな夢かもしれないし、ヴァーチャル・リアリティ（仮想現実）で見せられている精巧にできた疑似体験かもしれません。

またたとえば、先ほどイスだと思って座ろうとした物体は、はたして本当にイスでしょうか。それはなぜイスなのでしょうか。もしかしたらそれはイスでないのではないのでしょうか。誰かに私たちは騙^{だま}されているのではないのでしょうか。

私たちはこうやって疑問を持って問い続けていたら、いつまでたってもケーキを食べられないし、座することもできなくなります。このように、どこまでも問い続けることをしていたら、日常生活を送ることはできません。ですから 私たちは、問い続けるのをやめて生活しているのです。

しかしながら、私たち人間は、もともと知的欲求、知的好奇心があり、生まれながらにして知りたいと思い、どこまでも問い続けようとしています。【e】いまはたんに問い続けることを中断させているにすぎません。しかもこの問い続けることは、特別な資格や技術がないとできないものではありません。疑問に思っ問い続けることは、誰にでもできることであり、幼い子どもでも自然にできていたことです。したがって私たちは幼いときから、知りたいと思っ問い続けること、つまり哲学することをおこなってきたのです。実は、すでに私たちは哲学していたのです。ただし、いまは哲学することを中断させて生きているにすぎないのです。ですから本当は、私たちはこれから哲学をはじめめるではありません。

（二）
哲学はすでにはじまっていたのです。

（青柳雅文『疑う、知る、考える 哲学をはじめろ』より）

※問題作成上の都合で、原文の一部に手を加えてあります。

問一 傍線部(1)～(3)のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

12 (1) 平コウ

- ① 大臣をコウ迭する
- ② 東京のコウ外に住む
- ③ 福利コウ生
- ④ 度量コウ
- ⑤ 対コウ策を練る

13 (2) シズんで

- ① 自説を開チンする
- ② チン痛な面持ち
- ③ チン品を収集する
- ④ 法曹界の重チン
- ⑤ 最低チン金が上昇する

14 (3) おナカ

- ① 山の中フク
- ② 喪にフクする
- ③ 無条件降フク
- ④ 紙フクが尽きる
- ⑤ 体力が回フクする

問二 次の文が入るべきところは、本文中の【a】～【e】のうちのどれか。最も適当な箇所を、後の①～⑤の中から一つ選べ。

やはり難しそうに感じるでしょうか。

15

- ① 【a】 ② 【b】 ③ 【c】 ④ 【d】 ⑤ 【e】

問三 傍線部(ア)「それが批判です」とあるが、筆者は批判というものについてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

16

① 本来は「分ける、区別する」という意味の言葉であり、私たちは批判をつうじてさまざまな角度から対象を見ることになるが、たとえば、イスを見るときに部品に分けてその仕組みを調べるといっても、批判に該当する。

② 今では「非難」と同じような意味で使われることが多いが、歴史的には哲学ということばと同じギリシャ語の語源をもち、「分ける、区別する」という意味で使われるのが、本来の「批判」ということばの用法である。

③ 知的欲求や知的好奇心にもとづき、問うたところでなんの意味もないことを対象として、あえてその存在意義を問うことであるが、どれだけ批判を続けてみても、当然、答えは出ないので、徒労に終わることとなる。

④ つねに「なぜ?」「どうして?」という疑問をもち問い続けることであり、したがって、相手の誤りや欠点を責める「非難」とは異なるが、今では非難と同じと見なされることが多いため、批判を途中でやめてしまう人が多い。

⑤ 「分ける、区別する」という働きを意味する言葉であり、哲学上は重要な概念だが、日常的な事物を対象として批判をしていたら、ケーキ一つにもありつけなくなってしまうので、めったやたらにするべきではない。

問四 空欄 X に入る表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

17

- ① ネガティブな意味で理解している
- ② 文脈に応じ適宜使い分けている
- ③ エモーショナルに感じることがある
- ④ シリアスな意味合いで用いている
- ⑤ さまざまな場面で濫用している

問五 空欄 Y に入る言葉として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

18

- ① 統合
- ② 総合
- ③ 併合
- ④ 混合
- ⑤ 照合

問六 傍線部(イ)「たとえば、幼い子どもには『質問期』と呼ばれる発達段階があります」とあるが、筆者がここで「質問期」に言及したのは何のためだと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

19

- ① 哲学では、イスやケーキといった日常的な存在も学問上の対象になり得るが、そのような身近なものに対して疑問を発する哲学者は、「質問期」と呼ばれる段階にある子どもとよく似ていることを示すため。
- ② 哲学では、現状を批判的にとらえ、世界の本当のあり方を模索していくことが求められるが、そのときに発揮される知的な欲求や好奇心は、「質問期」の段階で養われるものであることを示すため。
- ③ 哲学では、何か疑問を持ち、その答えやわけを追究していくことになるが、その疑問は、「質問期」と呼ばれる段階で誰もが発したことがある「なぜ?」「どうして?」という疑問と変わらないことを示すため。
- ④ 哲学では、日常の些細なことであっても「なぜ?」「どうして?」と疑問に思えるような特殊な批判的精神が必要とされるが、そのような精神を培うには、「質問期」の環境が重要になることを示すため。
- ⑤ 哲学では、つねに疑問を持って何かを問い続けるという途方もない作業が行われるが、それと似たことを「質問期」に経験した人は、大人になってから現実を批判的にとらえられるようになることを示すため。

問七 傍線部（ウ）「私たちは、問い続けるのをやめて生活している」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適當なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

20

- ① 疑問に思ったことであっても、いつまでも答えが得られないということではなく、答えがわかれば、疑問に思う対象も減っていくから。
- ② 日常で起こる現象を自明のこととして受け入れていくにしたがって、子どもころの知的欲求や知的好奇心は薄れていくから。
- ③ 子どもころは何かと疑問に思うことが楽しかったが、だんだんとそれにも飽き、平凡な日常生活を送ることを望むようになるから。
- ④ 哲学とは無縁の月並みな生活を送っていると、日常の細かなことを疑問に思う批判的な精神を、いつの間にか失ってしまうから。
- ⑤ 日常において、いちいち疑問に思いその答えやわけを探すようなことをしては、生活が立ちゆかなくなってしまうから。

問八 傍線部(エ)「哲学はすでにはじまっていたのです」とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

21

- ① 何かを知りたいと思い、問うことが哲学であるならば、幼いときから問い続けることをしてきた私たちは、その頃から哲学をしていることになるから。
- ② 現実を疑い、別のあり方を模索するという批判こそが哲学の要諦であるが、それは私たちが生まれるよりもはるか昔から、人間が行ってきたことだから。
- ③ 私たちは子どものときから、疑問を持って批判的に物事を考えるように習慣づけられてきたが、そのような思考こそが哲学の端緒となり得るから。
- ④ 疑問に思っ問いつけるという哲学的な思考は、特別なものではなく、誰でも自然にできるので、その意味で、哲学はいつの時代にも存在しているから。
- ⑤ 哲学においては、つねに何かを疑うという姿勢が求められるが、そのような姿勢は、私たちが生まれた社会に連綿と受け継がれているものだから。

問九 本文における筆者の主張として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

22

- ① 私たちは大人になるにつれ、疑問を抱くことが少なくなるが、それは知的に成長していることの結果でもあるので、その意味ではやむを得ないともいえる。
- ② 批判という哲学の方法は日常生活でも用いられるが、それは何か特別なことをしているというわけではなく、むしろ私たちの思考は最初から哲学的なのである。
- ③ 哲学的な批判によって、物事的能力や限界、可能性が明らかになるが、そのような批判が自己に向けられたとき、私たちは自分という存在を知ることになる。
- ④ イスやケーキのような日常的なものまでもが、哲学のテーマとして扱われてきたという意味において、哲学は決して縁遠いものではなく、むしろ身近な存在である。
- ⑤ 現代では、現実と仮想現実の区別が曖昧になっており、現実とは実は夢である可能性を否定できないので、批判することの意義がcaつてないほど高まっている。

Ⅲ 後の設問に答えよ。(各問において選択肢を重複して選ばないこと。)

問一 次の1～5の四字熟語の空欄に入る漢字として最も適当なものを、後の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

27	26	25	24	23
5	4	3	2	1
博物□理	自□自足	閑話□題	名所□跡	危□存亡

- ① 窮 ② 急 ③ 休 ④ 旧 ⑤ 給

問二 次の1～5の故事成語の意味として最も適当なものを、後の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

32	31	30	29	28
5	4	3	2	1
石に漱き流れに枕す	隗 かい より始めよ	牛耳を執る	燕雀安んぞ鴻鵠 こうこく の志を知らんや	泣いて馬謖 ばしよく を斬る

- ① 法律や規律を守るために私情を捨てる
- ② 自分の間違いをうまく言いくるめて言い逃れをする
- ③ 組織の中心となって自分の思い通りに事を運ぶ
- ④ 大事をなすには手近なところから着手するべきである
- ⑤ 小人物には大人物の考えがわからないものだ

問三 次の1～5の作品の作者を、後の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

33	1	『太陽のない街』
34	2	『本日休診』
35	3	『カインの末裔』
36	4	『牛肉と馬鈴薯』
37	5	『西班牙犬の家』 スペイン

- ① 佐藤春夫
- ② 井伏鱒二
- ③ 徳永直
- ④ 有島武郎
- ⑤ 国木田独歩